慈光

第九卷　第二號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第九十五号）

目次

世界に通用する日本人……花田正夫…(1)
易往而無人……福島政雄…(5)
煩悩と菩提……自在丸新十郎…(8)
聞信雑録……聚墨生…(13)

世界に通用する日本人

花田正夫

昭和三十一年は、日ソ国交が回復し、国際連合にも加入し、八十ケ国が集る議場で発言権が認められた。斯うした時に就任した灘尾文相は、その新任の言葉として『世界に通用する日本人を育成したい』と述べてゐる。

これまで我々日本人が外国に対して往々にして持つた、誤つた先入観や、偏見。譬へば、西欧崇拝とか、アジヤ軽視などの観念を払拭して広い視野に立ち、大国に対し卑下し、小国と見てあなどると言つた風なことがあつてはならない。そこに着眼して、世界に通用する日本人の育成といふことを文相が提唱したのであらう。

ここに私は、世界に通用する徳を身につけられた日本人として、即座に、聖徳太子と親鸞聖人を想ひ浮べる。そして太子の金言と、聖人の実語が、仏教者とか、真宗人といふ条件なしに、広く深く人々の心にとどけられることを願つてやまない。世界に通用する徳光がそこにおのづから建現せられると信ずる。

太子の金言

『日出づるところの天子、日没するところの天子に書を呈す。つつがなきや』

とは、太子が小野妹子を隋に派して、国交を開き、文化の交流をはかられた時の国書である。このことは現在では何でもないやうに考へられ易いけれど、千三百年昔の日本の実状と、絢爛と栄えた隋・唐の文化を思ひ較べる時、この国書の持つ気宇の実に堂々たるに驚かされる。

然し『ローマは一日にして成らず』、太子のこの雄大な気魄は、太子憲法に『世に生れながら知るものすくなし。刻く念ひて聖となる』と示されてゐる如くに、太子の多年の求道辛苦の建現である。

誰も知るやうに、太子は二十にして摂政太子となられ、蘇我氏の横暴、文化の低調、朝鮮の反乱等々、内憂外患相ついでおこる大暗黒の時代に、重責を一身に負はれだのである。

幸にも二十二歳の御時、恵慈法師を迎へられて専心に求道せられ、三十歳頃に心眼がやうやく開かれてゐる。

この開かれた心眼の前に、仏智照々として輝き、天地の秩序がおのづからあらはとなり、人材登用の道を、冠位十二階に開き、国家の永遠の理想と実践の道を十七憲法に掲げられて、内治外交に、国是の基盤を定め給うた。

前記の国書は、この太子精神の外交方面にあらはれた片鱗である。大国にむかつて卑屈にならず、小国と見て軽視せず、堂々たる威風は、『事理おのづからに通る大和の精神』の発露である。

さてこの雄大なる太子精神を仰ぐ時、我執、偏見の塊とも申すべき我が身の、煩悩に汚染された、暗黒・醜悪の姿が照し出され、憤死してなほ足らぬものがある。

唯、幸にもかゝる身に

『篤く三宝を敬へ。……四生之終帰、万国の極宗なり。何の世、何の人かこの法を貴ばざらん。人はなはだ悪しきものすくなし。よく教ふるをもて従ひぬ。夫れ三宝にたよりまつらずば、何を以てか枉れるを直うせん』

と、救ひの御手を示されてゐる。かくて中外にもとり、古今にあやまりて、事理の通ぜぬ身に、古今に通じ、中外にもとらぬ光明を仰ぎ得るのである。これひとへに太子の金言に育くまれる者のよろこびである。

ここの消息をうかがふために、道元禅師の言葉を借りる。禅師は数年中国に留学して学び得たのは『柔輭心』だけであると告げてゐる。この柔輭心とは自分が方円の器に順ふ水の如き心になれたといふのでなく、仏の柔輭心を学んだといはれる。ごつ〳〵とつきあたる氷の心も、仏の大柔輭心に転ぜられることを讃仰している。我等も亦、三宝の大悲心に、枉れる身も直うされるよと太子は仰せられるのである。

聖人の実語

『親鸞弟子一人ももたず候』とは、御同朋、御同行としてかしづかれる聖人の耳に、わが弟子、ひとの弟子といふ弟子争ひの声を聞かれた時、それをいたみ、哀しまれて、自然に述懐せられた実語である。

弟子の無いものが、弟子を持たないと言ふのであれば、それは当然の言葉であるが、師とお慕ひ申す沢山の弟子を持たれながら、弟子一人も持たず、と仰言る。しかもそれが単なる謙遜でもなく、もとより嘘言でもない。さう言ふ言葉は相対五分五分の世界にはあり得ない。して見ればこの言葉の出る聖人の心の樹は深く根ざしてゐる。

池山先生はこの言葉の出る聖人のつややかにかがやく御姿を感佩せられて、麗容の聖人、湯上り姿、上男振り、等

等と讃仰せられた。それは寒い日にズツプリと風呂に入り、身体の隅々まで温まり、垢などもきれいさつぱりと洗ひおとして、再び湯につかつて、風呂から上る時、身心共に暖かく、浴衣がけでも寒さが一向に苦にならぬことがある。聖人の心が、大慈大悲の仏心の湯にずつぷりとつかりきられての御述懐が、この『弟子一人も持たず候』である、と語られた。『ただ念仏して』の一つに破闇満願されたところから自然に述懐せられた実語である。

私共はこの聖人の御言葉にふれると『左様で御座いますか』と、こばむことの出来ない真実さに触れて、おのづから大いにうなづかされる。猫の首筋を掴へて下げると手も足もダラリとなつて無抵抗になるやうに、聖人の仰せには反抗しようにも反抗の心がおこらず、老人であれ若人であれ、学者であれ、文盲者であれ、仰せ通りであります、と承服信順せしめられるものがある。それが即ち世界に通用する徳の根本である。

又或人は、聖人の常の仰せ

『弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたちけなさよ』

を感佩して「聖人の後向姿の御教化」と随喜された。聖人は常に仏の方に向つてその善巧と慈育を讃仰して居られて、仏を背にし、人々を前にされて、あゝしろ、かうなれと号令かける方ではない。聖人が御自ら深く味はれて、そのまゝを述懐して下さる、さういふ御教化は自然に心に染み、身について薫習せられ、永く消え去るといふことはない。これが自然の感化といふものである。そこに古今を超えると言ふか、時代の垢がつかぬものがある。

さて聖人からどうして、世界に通用し、古今に流通して万人がこばむことの出来ない真実のひかりが出るのであらうか。

聖人はもとより、御自ら告白せられる通り『浄土真宗に帰すれども真実の心ありかたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心はさらになし』である。それなのに何処から光明が放たれるのであらうか。聖人は光明のない蛇蝎奸詐の心である。唯聖人を縁として弥陀仏の返照の光明を仰ぐ。恰も明月が夜空に皎々と輝くのは、月そのものに光があるのでなく、十方を照してやまぬ太陽の光の返照であると同様である。

さて、尽十方の無碍の光明に照護せられる生活、心光照護の生活が信心生活である。そこに聖人は、天親菩薩の

『一心に尽十方無碍光如来に帰命す』

の白道一筋を、御自ら歩まれつつ、それを我等に勧められるのである。それは太子の「篤く三宝を敬へ」の思召し通りである。

むすびの言葉

私共は、太子と聖人の如き、遠く未来を照し、広く内外に通ずる御眼を持たれた方を、私共の祖先に持つてゐるといふこは、実に有難いことである。そして太子の金言は錆びるいふとことはないが、伝承された太子像はあまりにも島国的日本色に汚されてゐるものが多い。同様に聖人には空しい言葉はないけれど、今や仏教の一宗派の開山聖人と祭られて狭いわく内に閉ぢこめられた聖人像が多くならべられてゐる。

巨竜は海底から跳り出て、大空にのぼつて虚空を飛揚すると聞くが、太子と聖人に、一切のわくが取り除かれて、本来の御姿において、その実語と金言のすべてが日本人の耳に伝はり眼に刻まれる時、世界に通用する日本人の目が開かれると確信する。本稿で引用した金言、実語は、ただその兎毛塵のひとつにすぎないが、読者の皆様の手で存分に見出され、照会せられんことを乞ふ。

良寛

花無心にして蝶を招き
蝶無心にして花を尋ね
花開くとき蝶来り
蝶来るとき花開く
吾また知らず
人また知らず

知らず、知らずして
帝の則にしたがふ

鬼貫

新しい句はやがて古くなる恐れがある。
古くもならず、新しくもならぬ句こそ、
真実の句である。

易往而無人（四）

福島政雄

その次が『往き易くして人無し』それは易往而無人と読みまして、矢張り昔の御講者の御講釈を読んで見ますといふと、易往而無人といふところが大無量寿経全体の中の一番大事な中心となるともいつてもよい。このお言葉が一番中心になると云つておいでになります。

『往き易くして人無し』と。絶対他力の道である。自分の力でつとめ励んで行くんぢやない、仏様のお力によつて往くんである。これほどやさしいことはないけれども、さういふやさしい往き易い世界であるのに、仲々そこに入つて往く人がない。

サア、これは世間を見渡してといふ問題になりますと、かう云ふことも言へるでありませう。皆様は御承知でありませう。この殊に終戦以後、新興宗教といふものが種々あらはれて来てゐるでありませう。私は一つ一つはよく知りませんけれど、種々のものがあるやうであります。西本願寺の方ではこの新興宗教のいくつかを誰かにたのんで、しらべさして、批判して、それを一冊にして、新興宗教の解説と批判と云ふ本を出して居られますが、私は読んでゐませんが、新興宗教といふものが、種々のものがおこつて来て居ります。

その不思議なことには新興宗教といふものはドン〳〵と信者といふものがふえて行くのであります。私の知つてゐる人にもそんな方に熱心になつてゐる人がありまして、自分は毎朝早起きして行つて、そこで建築か何かの加勢に励んで行く。朝起きて行くといふものはよいものであります よと言ふのであります。成る程朝起きはよいのでありますが、然しどうでありませうか、枯れた野原の枯草を火が焼いて行くやうに、パアッとひろがつて行くやうな、さういふものは実は、あやしいものであります。

それは昔のことを云へば、法然上人がお出ましになり、法然上人の教といふものに沢山集り、敵も、味方も源氏も

平家も、朝廷の大宮人も信ずれば、名もなき率土の民も信ずると云ふ風に云ふのでありますけれど、それは今日からさう云ふのでありまして、その当時に居つたならば、仲々この法然上人、親鸞聖人の道にほんたうに入つてゐると云ふ人は極くすくなかつたでありませう。

それは例の御伝抄にも出て居りますやうな、信の坐とか行の座とかのあんな問題のところを見ましても明らかでありますやうに、法然上人直々の御弟子三百何十人ありましても、法然上人のみ教が徹して居るといふ人々は、親鸞聖人やら熊谷蓮生房、そんな人々で、僅か数人であつたのでありまして、お弟子ぢやあるけれど、仲々この仏の教に徹して目ざめてゐるといふ人は尠なかつた。実際さうであつたのであります。いはんや今日の新興宗教などは大抵は迷信であるといつていい。親鸞聖人の言ひ方からすれば、自力的なものはみんな迷信でありまして、近角常観先生などもハッキリ仰言つて、自力の教といふものは、どんな立派なものでも迷信だといつておいでになりました。

成る程、さう云はれますといふと、今日の新興宗教といふものは、みんな迷信であります。だからドッと集ります。急に集つたものは急に冷えて行くものであります。

さういふものでなくて、親鸞聖人、法然上人のみ教といふものが、七百年、八百年の今日に至るまでの間に、段々と深くこの日本国民の庶民の心にしみこんで行くことは、大抵なことではないのでありまして、実際のところ、往き易くして人無しであります。決してこの野原に火を放つた様にパアッとひろがるといふやうなものではない。近角先生が一生涯の間、非常な熱をもつてお説きになつて居りましたけれども、仲々弟子がなかつたやうであります。先生が申されて居りました。福岡県の方へ行くと近角宗といふものが沢山居てこまる。近角宗といふものが沢山居つて困ると仰言つたのは、パアッと解つたやうな調子でもつて、仏の教に徹してゐない。仏のお慈悲に徹してゐないのが多い。そして近角先生、近角先生といつてゐる。これぢや法然上人や親鸞聖人の道に徹してゐない。そこを歎いて仰言つたのであります。

近角宗といふのが多くてこまる。実際はそんなものでありまして、私なんかも、さう仰言ると近角先生の教を二十八年も聞いて、お育てを蒙つて居りながら、先生から御覧になると生温い奴だと、お思ひになつたに違ひないのであります。生源いけれども、まあ教育といふものを研究してそして親鸞聖人のことを熱心に言つてゐるから、まあ、いいんだと云ふ具合に、広い胸に収めて下さつたのでありませう。

さうなつて来ますと実際、往き易くして人無しとは、他

人の問題でなく、私の問題であると云ふやうなことになります。

実際この『往き易くして人無し』について、今一つこの問題といふのは、実際『弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つこころのおこるとき、即ち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり』といふ歎異抄はじめの、あのお言葉、あれが、弥陀の本願にたすけられまゐらせて、念仏申される、お念仏が浮んでくる、いふところになつてくると、あゝ何と往き易い道であつた。然しながら仲々ここが入れなかつたことであるなあと、自分で自分の心を振り返つて述懐することであります。

だから絶対他力の道は、仲々入つて見ると成る程行き易き道であるけれど、然しながら仲々入れない、ほんたうに仏のお慈悲に徹せしめられてといふことにはいかないものだな、実際自分といふものがさうぢやないかといふことを振り返つて歎ずるといふことになるのでありまして、往き易くして人無しといふ心持はそこかと思ふのであります。

然し『その国逆違せず、自然の牽くところなり』でありまして、その国は何の無理もなく、その世界に入つて行かれるといふところである。

自然の牽くところ。自然といふのが、もう三度も出てゐるのでありませう。自然といふのがこの味はひの深いところであると思ふのであります。無理のない、自然のひくところ、無理なくその世界に目がさめて来る。それは私共が人生問題に苦しみ行きなやんで、いよ〳〵行き詰つて来るといふところになつて来ると、自然と、何時の間にか、み教を聞いて、自分の心がひらかれて来るといふので、無理なくひらかれるといふのが、自然のひくところであると、かういふところの味はひであります。

それで『何ぞ世事を棄て、勤行して道徳を求めざる』。俗世間のことを棄ててこの道徳といふもの、この仏の本願の道といふ道徳であります。それを求めて行けば、永遠のいのちを頂く。そして生命が長く、そのたのしみといふものは、この世間のたのしみとは違つた、何とも云へない、極りのない楽しみであるといふところでここが切りになつてゐるのであります。

これだけの短いところでありますけれども、実際に、非常に深い味はひのところでありまして、私、大無量寿経を拝読して、ここのところに参りますと、何とも云へないしんみりと、然も、自分の心をひらかれて来るといふところに打たれて参ります。矢張り昔の人が申された通りに、易往而無人といふところが、大無量寿経全体の心持を云ひあらはしてあるところであり、且つその中心であると仰言つてゐるのは、さうでありませうかと思ふのであります。

親鸞聖人がさう云ふ風に法然上人の御教をうけて、そして私共に、何処までも深く、ここまでといふことのない、何処までも深くといふ信心の道を開いて下さつてゐる。

さうでありますからして、私共は矢張り、この一生涯が求道の一生である。ここまでで及第で、これから先は問題なしといふやうなことではありません。で、この一生涯がこのまことの道に哺くまれ、まことの道に照らされ、まことの道にみちびかれ、まことの道に慰められ、まことの道に励まされ、何処までも人生の道を精進して参る。力みかへつて行くといふのでなくて、静かに、たえまなく、一歩一歩しつとりと進んで行くといふことが、私共にひらかれてゐる道である。これがこの親鸞聖人の御教の味はひであるといふ風になりますわけであります。

ここが最初の序のやうになつてこれから悲化段、五悪段といふところに入るのであります。それはまた次の機会に申述べたいとおもひます。

煩悩と菩提

自在丸新十郎

仏教の真髄と他力真宗の特色を最もよくいひ表はされてゐると思はれますものに、『本願円頓一乗は、逆悪摂すと信知して、煩悩菩提体無二と、すみやかにとくさとらしむ』といふ御和讃があります。

本願とは私ども煩悩の多い人間を何とかして救ひあげたいといふ清浄な念願にもえられて、阿弥陀如来がお誓ひ下さつた四十八種の誓願のなかでの最も大切な第十八願をさすのであります。円頓一乗の円といふのは、円熟とか円満とか申しますやうに、仏教でも極速円融の白道とか、円融至徳の嘉号とか、円融無碍など大変沢山用ひられてゐます言葉で、まるい円は三角や四角と違つて凹突がなく、どこがどうあつてほしいといふ不足な分がないので、完全無欠

といふ意味であります、頓といふ言葉は漸教に対する言葉で、漸教は妙覚といふ仏の覚りの位まで十信、十住、十行、十廻向、十地で五十段、その上に等覚と妙覚がありますから五十二段になりますが、それらを一段一段と昇つてゆくので大変永い時間がかゝる教であります、頓教は一念といふ誠に短い時間に四十一段目の初地の位とか、兜率天に居られて次の仏になられるまで待つて居られるといふ弥勒ぼさつと同じ等覚の位、即ち五十一段目の位までつれていつて下さる教で、大変勝負のはやい教であります。聖人は仏の説かれた御教を四種類に大別されましたが、横超と仰せられたのがそれを表はしてゐるのであります。

一乗といふのは、乗は乗物のことで、私たち衆生をこちらの娑婆といふ迷ひの世界から、向ふ側の彼岸とよばれてゐます悟りの世界まで運んで下さる教法であります。この乗物にも色々説かれてゐまして、阿羅漢の覚りや独覚といふ覚りまでのせて行つて下さる小さな乗物もありますが、この一乗といふのは、『一乗海といふは一乗は大乗なり、大乗は仏乗なり』とも、『大乗には二乗三乗あることなし』とも聖人は仰せられて、すべての衆生を一人残らずのせて行つて仏になさして下さる大きな乗物であります。阿羅漢とか独覚といふ覚りは、仏になさして頂くための途中の方便の覚りだと説かれてゐます。ちやうど池や湖の様なもので、これらに注ぐ川も遂には池や湖から溢れ出て自然に仏の大海に注ぐのでありませう。

このやうに本願円頓一乗といふのは、阿弥陀如来が私たちを一人残さず救つて下さる完全無欠の教で、然もそれは永い時間を要しない教といふ意味であります。御本願は前の言葉のやうに、一乗海とも本願海とも申されまして、よく海に譬へられます。海はどんなにきれいな水でも、どんなに穢い水でも、またどんなに大きな川の水でも小さな水でも、取捨選択はしないでおさめ入れて同じ一味の塩水に致しますやうに、御本願は賢い人も愚かな人も、老少男女の別もなく、職業の如何、地位の如何をとはず、皆一様に救済して下さいます。五逆罪を犯した極悪人たちにも、十悪を犯した人たちにも一様に慈悲の手をさしのべて救つて下さるのであります。

御経の中には、実は五逆罪を犯したものと仏法をそしつた者はこの救済から除外されると説いてあります。五逆罪とは父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し仏身から血を出した人人や僧団を破る人々であります。仏の体から血を流す様な人は、仏の説法を真に受けて信ずる筈もありませんし、仏法をそしる様な人は仏法に耳を傾けよう筈もありません。だからこのやうな人々は、事実本願によつて救はれやう筈はないのであります。然し如来の慈悲には雨の地上を一様にうるほすやうに、相手によつて差別はつけませんから、

もし私どものやうな極悪人でも、心をひるがえして如来を心から信ずるやうになりますれば、善人だ悪人だといつたわけ隔てなく、一様に救はれますことは勿論でありません。十悪とは体や口や心で犯す罪悪であります。五逆すら救つて下さる大悲ゆゑ、十悪が救はれない筈はありません。

私たちは五逆や誹謗正法のやうな大それた罪は他人の身上に想像してみる位のことは致しましても、吾身にひきあてゝ反省される方は極めて稀のやうであります。仏教は行為として外に表はれた事柄だけを取扱ふだけではなく、心の中の問題を重視致してゐますから、私たちは親を手にかけて殺すやうな行はしなくとも、精神的には屢々親をないがしろにしたり嫌つたりなどして殺すも同然の大罪を犯してゐるのであります。

煩悩は私たちの心を煩はし悩ますものでありますから、結構なものではありません。もし私たちに煩悩がなかつたら、この世はどれほど楽なものになるか知れませんが、誰れでもこれだけは持合せてゐるやうであります。最も普通なのは貪欲、瞋恚、愚痴であります。貪欲は欲望に発するむさぼりで、お金がほしいとか家財道具がほしいとか綺麗な着物がほしいとか高い地位や名誉が得たいとかいふやうな欲望であります。瞋恚とはいかることで、これもまた誰でも毎日やつてゐることであります。世にはいかりを顔に表はさないで、普通ならばおこるところをにこにこ笑つてすまして居られるやうな大変教養の高い人もゐますが、表に出さなくとも心に抱く人は多いのであります。愚痴とは何にもならぬことを、くよくよ思つて不平不満の生活を送ることであります。元よりこんなことはよいことではないので十悪の中にも教えられてゐます。

菩提とは梵語の音訳で、道とか智慧とか悟など申されてゐます。煩悩は私たちの望むものではありませんが、菩提は願つてやまぬものです。菩提心はこのやうな菩提を求むる心にほかありません。煩悩はつゞまるところ、私たちに本当の智慧がないところから起つてくる心の迷でありますが、菩提は之に反して煩悩から解放された悟であります。仏教に於ける光明は智慧を表現致してゐますから、煩悩は無明とも申され、菩提は光明とも申されませう。煩悩は私たちに苦感を招くものでありますが、菩提は楽感を与へて下さいます。だから仏教はどの宗派でも、その目的は同じで、私たちの煩悩を菩提にかへしめる処に意義をもつもので、従つてもし苦しい私たちの生活を楽しい生活に転換して下さらぬ教であるならば、それは有名無実の教といはねばなりません。

煩悩即菩提といふ言葉がよく使はれてゐます。煩悩はそのまゝ菩提に外ならぬといふ意味で、私たちは煩悩と菩提を区別して、煩悩をきらつて菩提を求めてゐますが、それ

は誤りで、煩悩も菩提も一つだといふことであります。仏教の原則論から申しますと、確かにさうなつてゐるやうで、私たちは煩悩と菩提とを二つの違つたものと思ひこんで菩提を願つてゐるのではありますが、実は菩提は煩悩をなくしては得られるものではない、煩悩そのものが菩提だといふことになつてゐます。然しこれはあくまで原則論でありまして、本当は覚つた方の立場から説いた道理といふことでありませう。

聖人は煩悩菩提体無二と仰せられて、両者は同じだと申されましたが、これも原則を申されたわけであつて、他の言葉にかへますと、生死即涅槃、娑婆即寂光土などとなります。原則（真理）はさうでありましても、私たちにとつては、煩悩はどこまでも煩悩であり、菩提はどこまでも菩提でありますから、煩悩をきらつて菩提を求め、娑婆を厭うて寂光土（極楽）を願ふといふことになりますのもやむを得ない次第であります。

それではどうすれば菩提または涅槃が得られ、寂光土に往生できるかといふことが問題でありますが、仏教はこゝで多くの宗派に分れるのであります。手段方法が違つてくるからであります。

他力真宗ではどうせよと御教示下されてあるかと申しますと、阿弥陀如来を至心に信楽せよ、わしの名号を聞けと経文に説いてゐるのであります。信（楽）も名号を聞くといふことも、言葉は元より違つてゐますが、同じことで、阿弥陀如来をたゞ阿弥陀如来と聞けばよいのであります。聖人は聞くといふのは、御本願がどうしてでき上つたか、そのいはれを聞いて疑はないことだと説明下さつてゐますやうに、私たちは御本願の出来あがつたいはれを先づきゝわける必要があります。でないと、何が何やらわからないからです。そのいはれは御経の中に詳しく説かれてゐますが然し御本願のいはれをきくといつても、なるほどさうかと合点理解する程度であれば、それは信心とはいへないのでありまして、人間の分別はからひにすぎない聞き方であります。だから唯だ弥陀如来の名前をきくだけだといつた方が如実になるやうであります。たゞ念仏、たゞ称名で、この外には何一つはからひも感情もはいつてはいけないのであります。そうしてそれが如実になりますと、名号が全身全霊にしみわたりて下さるのであります。もやもやした雲のやうな煩悩が、名号の威力で払ひのけられてはつきりさせられるのであります。この瞬間を信の一念だと教へられてゐます、このあたり私のつまらぬ自督を述べまして誠に恐縮に存ずる次第であります。

仏教の道理で大切なものに因縁法といふのがあります。すべての事柄は因だけでは起らないのでありまして、必ずこれに縁といふものがくつついて始めて結果が生れるといふ道理であります。肉体も精神もその他一切のもの事は、

みな因縁法の支配するところであります。今氷といふものを一例にとりますと、氷といふ因だけでは水は得られません。この氷といふ因に熱するといふ縁が仂いて始めて水といふ結果が得られるのであります。

私たちが如来を信ずるといふ場合でも、同じ道理に基くのでありまして、私たちのやうな煩悩の塊であります凡夫が、仏になさして頂くためには、やはり縁がなくてはならないのであります。この縁になるのが阿弥陀如来の大願業力であります。これは如来が御本願を成就遊ばすために無限の歳月をかけて養ひあげられた清浄真実の力だといふことで、私たちの心にはまだ一度もふれあつたことのない不可思議不可称不可説の力であります。これが縁（増上縁）となつて仂いて下さるために、私たちのやうな仕方のない凡夫（因）が仏果を得さして頂くのでありませう。このやうに私たちが仏になして頂くことができますとすれば、それは弥陀如来の本願業力が縁となつて仂いて下さつたためであります。

ところが、仏教には因縁法の外に第一義諦とよばれる最も大切な道理があります。これは物事は凡て平等一如（一体）だといふ見方に立つた道理でありまして、これが欠けますと、仏教も差別の半面観だけに終るといふ結果になります。因縁法では、私たちの煩悩が如来の本願力を縁として仏の菩提にかへさして頂くのでありますから、煩悩と菩提の区別があるわけでありますが、第一義諦では、煩悩とか菩提といつた区別は全くないと説くのであります。だから聖人が煩悩菩提体無二と仰せられたのであります。この場合は実際問題としては、煩悩も菩提も如来の大願業力によつてとかされてしまつたといつた方が適当であるかも知れません。このやうに仏教ではすべての宗派を通じて、物事の差別観と平等観とが不即不離（つかずはなれず）の関係にあることを説くのであります。

御本願は五逆罪十悪を犯してゐます私たちを救ひあげて下さると信知して、煩悩と菩提とは一体であることを速かにとく覚らして下さると祖師は教へて下さいました。信知とはいかにも私たちが、信知するやうに受取られ易いのでありますが、私はさうではなくして、これもまた如来によつて信知さして頂くことだと解したいのであります。このやうに信知さして頂くことによつて如来の本願業力を蒙り、五逆や十悪の極悪人であります私たちが一様に救済さるゝのであります。だからそのこと自体が、煩悩と菩提は違つたものではない、一体であつたことがすぐに体験さして頂けるのであります。如来によつて一体だと判らして頂くことゝ、信知さして頂くことは、前後があるわけでなくして、実は同時なのであります。何れも本願力の廻向によることは申すまでもないでありませう　（了）

聞信雑録

聚墨生

○一月五日夜。東京の柳瀬甞治さん来庵下さる。

『藤原俊成は夜半独り、歌心のまことに感泣した。西行法師は、月や花をあだかも仏を讃へまつる心で、歌ひ、讃えてゐる。

人も見ぬよしなき山の末だにも
すむらん月の影をこそおもへ　西行

この歌なども大好きな歌の一つである』

と語られつつ、涙を浮べられてゐた。

○一月十三日。日曜講話。

『行に迷ひ信に惑ひ、心暗く識尠く、悪重く障り多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行につかへ、唯斯の信をあがめよ。……』

この『ことに如来の発遣を仰ぎ』と仰せられる聖人の悲心に感深し。暗い心をいぢるのぢやない。如来の発遣を仰ぐんだ。『一心正念にして直に来れ』の招喚の声を聞くんだ……との切々哀々の徳音を感佩す。

○午後北村乗雲さん御夫妻で来庵下さる。

寸刻を惜しんで談合。

『あんたは常音先生によく接してゐるが、常観先生から直接の話はあまり聞いてゐないから、常に繰り返された有名な話をしよう』

とて、二つ三つ、語り出されたが、涙につまつて了はれる。そして本年は十七回忌、十二月三日が先生の御命日、是非上京するやうにと招かる。

その時、北村さんが鎌倉の朝比奈禅師から聞いたとて、白隠禅師のトンボの逸語を伝聞する。

『白隠禅師が寺の庭を散歩して居られると、トンボが殻を脱いで出ようとして、ビク〳〵、ビク〳〵と難儀をしてゐるのを見つけられた。早速禅師は手を加へて、どうにか脱皮させたけれど、そのトンボが飛べないでとう〳〵そのまま死んだ。

そこで、其話を禅師の知人に話されると、わしも可哀想に思つて、トンボの脱皮をたすけたことがあるが、どうしても飛べないトンボになつて了うた、とのこと。

禅師はそれを聞かれて、大いにうなづかれて、あゝさうか。あの脱皮の苦労こそ、手足を力強くさせ、羽根も立派

にさせるになくてはならぬ苦労であつたのか。自分はトンボに同情して、反つて殺してゐた、可哀想なことをしたものだ……。』

○一月二十一日。

交通事故で入院加療中の伊藤蔦三郎さんを見舞ふ。

『何時が来たら自転車で日曜講話に行けるだらうかと、思つてゐます。』

と右大腿部の骨折を指される。そして

『いくらお聞かせにあづかつてもわからないところばかりですが、わかればなほ有難いことでせうが、この分る力もない者を捨てぬとの親様、南無。々々。々々。』

との御述懐をきいて、私自身大いにうなづかされたことは、我々は一角親をよく知つてゐるかに思ひあがつてゐるが、肉親でも、本当の親心といふものは海よりも深く山よりも高く、測り知ることは出来ない。親の膝下を離れて親を慕ひ初め、親に死なれて更に恋ひしたふ。更に親の死の年齢が近づいて、気づかなかつた親心の片鱗がひらめいて来る。……。結局親心の真相は子にはわからぬといふのが本当である。この知る力もない身に、あれも、これも、と遠く深い御真実の御廻向。

久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおもひの池山先生の歌心にふれる。

それにつけても、聖人の『念仏はまことに浄土に生るる因にてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり』の御言葉も身にしみる。

見舞ひに行つて、かへつてこのやうな沢山の土産を頂いて帰る。

○一月二十八日

米国ヵ洲。スタクトン仏教会の五十年祭について法友北条恵実師から法信をうけた。跋文照会する。

『現在の米国仏教の状態は、日本から仏教が渡来して五十八年。米国日系人十万の中、約八万が仏教徒。白人も極く僅かながらボツ〳〵出来てゐる。特に大戦後、日米国交の親密さに伴つて、仏教の研究も盛んにならうとしてゐます。さて次に教会は北米に四十九、カナダに六。開教使は北米六十五、カナダは六名。……。

仏教渡来して以来、基督教国の米国に仏教が発展する可能性ありや否や。更にもつと深刻に、米国で仏教を伝道する必要ありやといふ議論や批判があつた。そして戦後に仏教は衰退すると悲観論があつたのに、戦後十一年の現在はそれを見事に破つて、仏教は依然として発展して居ります。それにつけても、仏陀のまことを信じ一歩々々しつかりと歩まして頂きます。』

編集後記

何時しか正月もすぎて二月、昔から二月は逃げると言ふ。実にアッと言ふ間に過ぎ去る。斯うしてすこし時のはやさが感じられる頃にはもう五十歳を過ぎてゐる。

○

本号で九十五号となり、百号もあと五ケ月。足かけ九年の刊行。今月は、今月はが自然に重なつたわけである。

念仏詩人、若くして死なれた、山村暮鳥さんの詩を北条開教使から知らされ、銘記す。

——あゝ勿体ない、あゝ勿体ない。
この手をどちらに合せたものか
今、陽が入る。
後ろには、月が出てゐる——。

——○——

△「易往而無人」の稿は、大経の中でも重大なところであると福島先生も述べられてゐますが、よく身読させて頂きませう。先生も御壮健と承ります。東京都調布市仙川町七九四番地が御住所であります。

△「煩悩と菩提」の自在丸先生の稿は、先生御自身の内から、何か湧き出てやまぬものがあつて、それが筆端にあふれて居り、襟を正さしめられます。福岡県戸畑市中原、九工大官舎が御住所であります。

△「世間に通用する日本人」はたまたま灘尾文相の言葉をきいて、かねゞ太子と聖人の上に感じて居りましたことを断片的に誌しました。世界事情の理解や文化の交流等も必要事でありませうが、根本の開眼を両聖から蒙るべき秋と信じます。

△聞信雑録は一月中の感話の断片であります。御判読下さい。

急告

第四日曜が廿四日に、二月も三月も相当しましたので、市内教西寺の講話日と定め、岡崎は二月中止、三月は卅一日の日曜に出講することにいたしました。

第一、二、三の日講はそのまゝ続けます。

聚墨生

——○——

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会館講話。

毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺法話会。

毎月第一日曜午后六時半、歎異抄輪読会。東区葵町一〇、善法寺。

慈光　第九巻第二号昭和三十二年二月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十日第三種郵便物認可

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）

名古屋市南区鯉上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市南区鯉上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番